（ 続紙 1 ）

京都大学	博士（　人間・環境学　）	氏名	増田　将伸
論文題目	Question-responses in Japanese Interview Dialogues : Examination of *Doo*-type Q-word Questions（日本語インタビュー対話中の質問ー応答—「どう」型疑問語質問の研究—）		

（論文内容の要旨）

この研究テーマは隣接諸分野からも多くの関心が寄せられている会話分析の領域でも重要なテーマである。疑問文の形式・機能とは何かについて、まず先行研究（Hultgren & Cameron 2010 など）を踏まえて、本稿は、情報・確認 等を引き出す行為と（受け手に）みなされる発話であるとの定義をすることから始める（第１章)。確認要求と質問は連続的であるとみなす観点から、対象とする文が情報等を引き出す発話か否かは応答者の指向により判断されるという立場をとっている。

続く第２章では、可能な応答の幅が広い Q-word 疑問文は、質問者の知識が少ない時に用いられる（知識量が少なくても産出しやすい）という出発点から始め、特に how「どう」について、下位分類がなされ、コピュラの補語を問う・副詞句を問う・過程や手段を問う・理由を問う と分けられている。

第３章で、「どんな」タイプの疑問文が扱われる。「どんな」は情報要求が活発な場合に用いられるとされ、この章ではその情報要求のプロセスを記述しようという試みがなされている。「どんな」タイプの疑問文を２大別し、タイプ①：包括的応答－「どんな」Q（Question）に対する応答の基本形（包括的に一言で応答。例えば具体的に、と続けて問われてはじめて具体的な内容描写をする)。タイプ②：対象へのアクセスが不完全な時の次善の手段（包括的応答ができない→描写により応答。断定は避ける）とまとめている。

疑問語による質問は、しばしば質問の対象となる事項について質問者の知識量が少ない時に用いられるものであるが、本論では、「どんな」タイプの疑問文を介して、質問‐応答を通じた情報授受過程が連鎖の中に顕著に表われていることが示される。「どんな～」質問では、無知の質問者に対しては実際はどのような情報も価値をもち得るのも拘わらず、応答者は包括的かつ簡潔な応答を指向しようとする。そして、包括的かつ簡潔な応答形式が困難な場合に、長々しい説明的描写による回答になるという。これは、今日なお研究途上にある疑問語質問・応答連鎖に関する選好構造の１つの方向を示すものと考えられる。また、いくつもの描写による応答が困難な際の形式として、「どういう～」質問が用いられ、この場合、多くは、直接的でなく長い応答形式がとられることが指摘されている。併せて、不定性の強い「なんか」＋しばらくの沈黙というパターンのあることを示す例証が挙げられている。なお、上記の検証には、「どんな～」質問 17 例、「どういう～」質問 23 例を詳細に検討したデータ分析が添えられている。

第４章は、それ自体では曖昧な「どう」ということばではあるが、「どう」が発話される文脈において参与者はこの「どう」を目的・状況に応じて使い分けていることを指摘

する。本章では、この「どう」の用法を羅列するだけなく、連鎖の進行の中で使われ方を捉えるべきという観点がとられ、置かれる位置（会話の開始部分など）について（１節）　あるいは制度（インタビューか自由会話か）に関して（２節）、論が進められる。筆者は、「どう」型質問 - 応答連鎖によれば、直前の連鎖に出ていない内容を話題として導入・設定できることにも言及している。こうして、先行する情報として前置きがある場合（慎重な話題設定）・ない場合（会話の進行性優先）に分けて考察が進められる。なお、会話開始部には特別な手続きが用いられるとし、使用したコーパス（CSJ）で「どう」を用いた会話開始手続きを分析している。そして「どう」は共有事項が少ない時（例：会話開始部）に使える一般性の高い疑問文形式であると結論付ける。さらに、通常、会話開始部の「どうですか（How are you?）」は挨拶のようなもの（greeting substitute）として応答が当たり障りなく拡張しないケースが多いが、今回、使用しているコーパス（CSJ）では、次に続く問いを続けて尋ねるなど拡張指向が見られることが指摘されている。

一般に日常会話では対話開始には一定の手続きが用いられるのが普通である。しかしながら、今回のコーパス（CSJ）では開始手続きがしばしば簡略化されている。これは、録音開始前に会話のチャンネルが確保されているからである。なお、HAY?（How are you?）についての議論に関して筆者は、挨拶連鎖の後に繰り返すことができることからも、これは挨拶ではなく、言わば交感的交渉とみなし、状況によっては純粋な質問とも捉え得るとしている。

そもそも、本論で分析の出発点となっているのは、一般性の高い「どう＋コピュラ」型の質問が挨拶連鎖の次に生起しやすいという事実は挨拶の代用としての HAY? と並行的ではないかという問題提起にある。ただ、日本語の「どう＋コピュラ」型質問は必ずしも挨拶の代用として用いられるとは限らないという点を契機に、筆者は、日本語会話の参与者は「どう＋コピュラ」型質問にどういう風に指向しているのかという問題設定から始めて、質問／挨拶の代用の間の曖昧性は生じているのか、あるいは、曖昧性をめぐる問題はどのように連鎖中で解決されるのかという諸点に関し議論を深めていっている。この章全体として、CSJ コーパス内の「どう」型質問 - 応答連鎖の諸側面を取り上げ、連鎖中の位置や「制度」（ないしそこにおける自らの役割）に感応した「どう」型質問の組み立て、および「どう」型質問 - 応答連鎖の展開の様相を示していることになる。これは「質問 - 応答連鎖の場面性」の１つの側面である。

まとめとして第５章では、第４章で取り扱った「どう」系 Q（Question）の情報要求的側面と、第４章の語り要求的側面を、連鎖の中で分析し、QA（Question-Answer）を通じた相互行為の様相が示されている。本論考は、連鎖分析から文法研究へ示唆を与える相互行為文法の構築を目指すという意味でも当該分野における貢献が大きい。

（　続紙　２　）

（論文審査の結果の要旨）

本論文は、連鎖分析から文法研究へ示唆を与える相互行為文法の構築を目指すという意味で、会話分析研究の今後の発展に大きく貢献するものである。本論文は、実証レベル・理論レベル・言語教育レベルの３つの方向から評価できる。

まず実証レベルの評価に関して、本論文は、実際のデータからのみ積み上げて帰納的に結論を導き出そうとするストラテジーであり、日本語話し言葉コーパス（CSJ, 国立国語研究所）という自由会話コーパスに基づき実証的考察が進めている点に独創性が認められる。この方法論は隣接諸分野から大いなる関心が寄せられている会話分析の領域での有望な研究手法であると言える。本論文が対象として扱ったインタビュー形式は、質問応答では情報授受以上のものを期待できるという社会行為的なコミュニケーションのあり方を解明するという狙いにも合致し、今後の会話分析研究を発展的に捉えることを可能にする高い将来性をもつものである。もう１つの実証レベルの評価としては、本論文は、術語の定義に関して、予め定義せず、むしろ実際のデータから読み取れるものだけを採用しようとした点が画期的であるということが挙げられる。会話の連鎖の中で、例えば間について、従来の先行研究でならば、応答の不在と捉えられがちであったところを、パラ言語的な要素・ノンバーバル（non-verbal）な所作も含めて、あくまでパロールの研究として貫いた点が評価できる。CSJコーパス内の「どう」型質問 - 応答連鎖の諸側面をもれなく取り上げ、連鎖中の位置やテキスト内での役割に感応した「どう」型質問の組み立て、および「どう」型質問 - 応答連鎖の展開の様相を具体的実証例に基づいて説明している。これは質問 - 応答連鎖の場面性の重要な側面である。

次に理論レベルの評価としては、本論文は、疑問文の形式・機能とは何かという問題について、情報・確認 等を引き出す疑問であるかどうかの判断は受け手に委ねられると定義している点が重要である。質問と確認要求は連続的であるという立場から、対象とする文が情報等を引き出す発話かどうかは応答者の指向により判断するという姿勢は、ラングの言語学からはなかなか生まれ得ない視点である。「どう」型質問という、一見、何を尋ねているのかわかりにくい割に、対話の流れを考察していく中で、その対象が浮かび上がってくるというパロールの言語学ならではの興味深さを指摘している。アプローチ法として、将来的には、人類の認知形式または知識構造、あるいは民族性など、自然言語全般に普遍的な現象の解明を目指すという計画にも期待が感じられる。

もう１つ別の理論レベルの評価としては、一般性の高い「どう＋コピュラ」型の質問が挨拶連鎖の次に生起しやすいという事実を踏まえて、挨拶の代用としてのHAY?（How are you?「どうですか」）が用いられているのではないかという問題提起が興味深い。日本語の場合、「どう＋コピュラ」型質問は必ずしも挨拶の代用として用いられるとは限らないという言語事実があり、この点に対して、申請者は、日本語会話の参与

者は「どう＋コピュラ」型質問にどういうふうに対応しているのかという観察を通し、質問／挨拶の代用の間の曖昧性は生じているのか、あるいは、曖昧性をめぐる問題はどのように連鎖中で解決されるのかという問題点に関し議論を深めていっている。こうしてHAY? ついての議論に関し申請者は、挨拶連鎖の後に繰り返すことができることから、これは挨拶ではなく言わば交感的交渉とみなし、状況によっては純粋な質問とも捉え得るとしている。一方、日本語の「どう」型質問については、テキスト言語学的に、一種のテーマ（主題）提示と捉え、これから述べる内容に先行するレーマの機能（解題）に帰している点は、一般言語学から見ても説得力のある議論展開である。

言語教育レベルの評価に関しては、次の点が挙げられる。すなわち、伝統的な学校文法の学習法・教授法では、従来の規則ベースの形式的な文法から脱却し得ない傾向があるが、文脈的・意味的な要因を考慮するコンテクスト・ベースの文法の重要性を指摘している点である。通常の枠組みでは、例えば省略はせいぜい情報の新旧、あるいは語順の規則などから説明が試みられる程度であった。本論文で現われる、主語なしで副助詞などが現われる構文（「（ ― ）は～だ」等）は言語構造に即した発話の表われと考えらえる。会話の連鎖の中で生じるこのような逸脱した語形は、もちろん個別言語性を十分に考慮しなくてはならないと同時に、自然言語に共通した会話分析の手法を加味した文法の必要性すら感じさせる。この意味でも、本論文で提唱された枠組みが会話分析に関する充実した学識を示しているものにとどまらず、学習者にとってより理解しやすく学習効果も高い、構文・文脈の解釈の自然な学習法や教授法へのヒントを言語教育の分野に提示するものと考えられる。実際に言語教育の場に本論文の知見をどのように組み入れ適用していくかは、なお課題として残される。しかしながら、本論文の会話分析の手法は、そこに至るための新しい視野を開拓できる可能性を十分に秘めていると言える。

全体として、本論文は、話し言葉の会話連鎖の分析を試みた理論的・実証的研究であり、この点では言語学の分野に属する研究である。しかし、本論文は、さらにテキストの構造に関する語用論的な現象をも分析の対象としている点で、文学・修辞学なテキスト分析への知見も含んでいる。また、本論文の研究成果の一部は、語学教育への応用の可能性を示唆している。この意味において、本研究は、独創性の高い分野横断的な言語研究であると評価することができる。

このように本学位申請論文は、当該領域における研究現状の把握や方法論の確立等、説得力のある記述がなされており博士論文の水準に十分達していると言える。また本研究は、共生人間学専攻言語科学講座の理念に叶ったものであり、言語の構造・意味・運用等に関わる人間の知のメカニズムを解明する基礎研究として高く評価できると共に、今後の言語学・コミュニケ―ション理論の関連分野への貢献が期待できる。

平成23年６月１日、論文内容とそれに関連した口頭試問を行った結果、合格と認めた。

Webでの即日公開を希望しない場合は、以下に公表可能とする日付を記入すること。

要旨公開可能日：　　年　　月　　日以降